まちニュース

12年ぶりに再編集

震災特別号

いわき地方 復刻 保存版発刊へ

「いったい、なんという日だったろう」

こんな書き出しで始まった本誌の「東日本大震災―いわき地方 150日の記録―『震災総集編』」。

その震災は――。

平成二十三（二〇一一）年三月十一日午後二時四十六分十八秒、東北地方の太平洋震源地とした地震が発生。その規模は、いわきで震度6弱、マグニチュード9・0という巨大さ。

この地震によって大津波が引き起こされ、同地方太平洋の沿岸部は死者、行方不明者、家屋の流失、崩壊は数えきれず、という未曽有の災害となった。

さらには双葉郡の大熊、双葉の両町にまたがる東京電力・福島第一原子力発電所の原子炉の一部が水素爆発して放射線量が各地に拡散したため、近辺の住民は緊急避難を強いられ、今まだ帰還できない住民は多い。

以来、十二年。

本誌は、当時の市域、および一円の状況を文と写真でまとめ、震災一カ月後の四月一日に『震災臨時号』、半年後の八月一日には第二弾として『震災特別号（グラフ編）』を編集、発刊した。

読者から要望の声

だが、多くの読者、市民から「十二年が過ぎたが、いわき地域のあの日のことを記憶にとどめ、これからの教訓にしたい」と、発刊を要望する声が相次いでいるため、十二年ぶりに再編集に踏み切った。

第三弾は、一部訂正、加筆、さらには今春三月十一日前後に実施された追悼式、各地でのイベント関連の写真も掲載。主タイトルはそのままにし、『復刻―保存版』＝写真＝の文字を追記した。

本は、フルカラー、A4五十二ページ（一部税込み千円）として発刊中。市内の主な書店、編集部（電話〇二四六―二九―二四二四）でも対応する。

八月三日必着。その他の詳細は同課まで。

「吉野せい賞」の作品を募集中

いわき市は、農民作家、故吉野せいの文学業績を記念するとともに、新人の文学作品を顕彰する「吉野せい賞」の作品を四月から募集している。

同賞は、好間町で開墾に明け暮れた日々の記録を書いた『洟（はな）をたらした神』で大宅壮一ノンフィクション賞などを受賞した、吉野せいの業績をたたえるため設けられ、募集は今年で四十六回目。

応募作品の部門は創作（小説、童話、戯曲）、文芸評論、ノンフィクション。

申し込みは、支所、公民館、図書館に備え付けの応募用紙に必要事項を記入して作品二部を市文化交流課文化振興係（電話二二―七五四四）まで。作品は

佐藤さんらが消防功労表彰

令和四年度の消防功労者消防庁長官表彰伝達式が三月三十日、県いわき合同庁舎で開かれ、いわき管内の消防団員十六人、消防吏員三人が表彰を受けた。

表彰を受ける佐藤さん（右）

同表彰は、消防規定に基づき、消防業務に従事し、功績等が顕著な消防職員、消防団員等、また永年勤続（二十五年以上在職）と、勤務成績が優秀で、他の模範と認められる消防職員および消防団員が対象。

このうち、いわき市消防団第一支団分団長の佐藤耕一さん（六二）（サトウ建装社長）が代表し、「今後も地域社会の安全確保と、消防使命の達成に全身全霊、精進して参ります」と謝辞を述べた。

ワタナベ時計店で与那覇大智絵画展

平字二町目、時計・宝石・メガネ「ワタナベ時計店」多異夢ホールで「与那覇大智 絵画展―丘を越えて―」展示販売会が五月十二日から二十一日まで開かれる。

与那覇さんは一九六七年、沖縄県生まれ。筑波大学大学院修了後、つくば市で三十年間、制作活動を行う。

作品は一貫して「光」をテーマに、独自の心象風景を描き続けた。今回は、「丘と空」をモチーフにした作品を加えた絵画が展示される。作家来店は、十二～十四、十九、二十日。

問い合わせは、同店（電話二二―二一三一）まで。